近く猛り來り、口を開きて飛かゝる處をうたれしに、咽に打込當ればそこに倒れ、起上らんとせしかども、痛手なれば終に死しぬ、

〔愈の須佐美追加上〕薩摩の士の語しは、義弘朝臣、朝鮮在陣の時、足輕馬草を刈んとて、山涯へ出しに、虎一つ來て、頸もとを輕く喰へ、山深く入、手玉に取て慰こと、猫の鼠を玩がごとく、久しく成て、眠くらく心きへ入しに、虎は其上へ横たはりて眠ぬ、時移りぬるにや、此男正氣付て見れば、己が上に眠居る程に、靜に彼が腹を撫ければ、鮮出けり、其時己が腰に附置ける細引を臥ながらひき出し、虎の淫囊をまとひつゝ、さて靜に□になを眠て居ければ、その繩を大木に固く結付置、早く歸て同列引つれ往て、それを驚しければ、虎怒て前なる岨へ飛けるに、淫囊切れはなれければ、卽死ける、其皮を剝て國君に奉りし、今に重器の蓋になりてあるよし語ぬ、

〔寛永諸家系圖傳宇多源氏亀井〕永綱

―茲矩

はじめの名は新十郎、武藏守、後亀井とあらたむ、〇中略翌年〇文祿二年二月廿一日、茲矩獵遊す、大虎ありて進來る、茲矩みづから鐵炮を放、虎これにあたり痛まずして懸きたる、茲矩又鐵炮をもつてこれをうちたをす、そのはなはだ大なるをもつて、牧彥十郎をつかはし、これを名箇屋に獻ず、秀吉かくのごときの大虎、日本におひてはじめてみるとのたまひて、すなはち牧彥十郎をめして御羽織を給はる、その後叡覽にそなへられ、車にのせて洛中をわたす、

〔駿府政事錄〕慶長十九年九月朔日、阿蘭陀人御目見、耶揚子出御前、虎子二疋引之來、内一疋尾之根上毛生有生風字、世以爲奇、江戸幕下若公達可進之由申上、

〔續近世畸人傳五〕熊斐安永元年十二月廿八日死、六十、

熊代彥之進初は神代と云、後改む、名は斐、字淇瞻、號は繡江、世間俗名をいはず熊斐をもてしらる、肥前長崎